

◎ロシア法務省、宗教関係中央団体56を解散へ

【C J C = 東京】ロシア法務省が10月半ば、宗教関係中央団体56を、手続き不備を理由に解散団体として発表したことから混迷が広がっている。

宗教関係の中央組織は562あるとされ、その半数以上の309団体がロシア正教会関係と見られているが、解散予定とされた56団体は、アルメニア使徒教会、カトリック、プロテスタント、ネストリウス派、イスラム、仏教関係のものが多く、正教会関係は含まれていない。

モスクワにある『法と正義・スラブ・センター』は、正教会関係の団体には事前に注意がおこなわれていたのではないかと推測する。総主教座の対外教会関係部門のフセフォロド・シャプリン副部長は、系列団体の2007～08年度認可申請に、法務省が「コメント」していた、と言う。ただその時期や、文書によるものか、口頭か、といったことには触れなかった。

正教会系列の団体には、事前に注意が行なわれ、その結果、解散リストにははいらなかったのだとすると、これはその他の団体に差別扱いをしたこととも見られる。1993年の憲法では、全ての宗教関係団体を平等に扱う、と定めている。

◎長崎で国内初の「列福式」、ひも解かれる隠れキリシタン史

【AFP、11月20日】ローマ法王庁がカトリック信者に「福者」の位を授ける「列福式」が24日、国内で初めて長崎市で行われる。17世紀の江戸時代に殉教したキリスト教信者188人に、最高位である「聖人」に次ぐ福者の位が授けられるが、日本でのキリスト教布教における暗い過去が再び語られる時でもある。

日本ではキリスト教は深く根付いていないが、カトリック教会では今回の式をきっかけに、キリスト教の歴史に関心を持つ人が増えることを期待している。

キリスト教は1549年、ポルトガルのイエズス (Jesuit) 会宣教師、フランシスコ・ザビエル (Francis Xavier) により日本にもたらされた。しかし幕府はまもなくキリスト教禁止令を出し、信者への迫害を開始。

幕末に米国の圧力で開国し、明治維新後の1873年、信教の自由が認められるまでの250年間に3万人が殉教したとされる。「世界を歩いた神父」として知られるペトロ岐部 (Peter Kibe) も殉教者のひとりだ。

この間、「隠れキリシタン」たちは辺境の島などに逃れ、マリア像を仏像に似せたり、仏像の背中に十字架を彫るなど、仏教徒と見せかけるための工夫をこらし、キリスト教への信仰を続けた。

信者への拷問は壮絶だった。はりつけや斬首はよくみられ、耳を切って逆さづりにし、全身の血が抜けるまで放置する方法もあった。雲仙岳の火口に生きたまま放り込まれる者もいた。また信者の家族は、たとえ生後12か月の乳児であっても、一家全員が皆殺しにされた。

■祖先が隠れキリシタン、迫害の歴史への関心高まる

今回の隠れキリシタンたちの列福は、書類の提出から25年以上を経て前年、現ローマ法王ベネディクト16世 (Benedict XVI) が決定した。式は平和を象徴して、1945年8月9日に原爆が投下された長崎平和公園で行われる。法王庁の前列聖省長官ホセ・サライバ・マルチンス (Jose Saraiva Martins)

枢機卿が出席するが、政府関係者は、カトリック教徒である麻生太郎（Taro Aso）首相さえも招待されていない。

キリシタンの迫害についてはある程度は知られているが、関心は総じて薄いと、歴史家らは口をそろえる。日本におけるキリスト教徒の数は100-200万人、うち約50万人がカトリック教徒と推定される。

ある地元の女性は、自分の祖先が殉教者だったことを知ったのは、つい最近のことだと言う。「いい意味で衝撃でした。カルチャーショックといってもいいでしょう。わたしみたいに、祖先が隠れキリシタンだったことを全く知らない人は、たくさんいるんじゃないでしょうか」

そうした言葉を反映するかのように、地元自治体は、キリシタンの歴史に興味を持つ人が最近にわかが増えてきていると言う。観光収入に大きく依存しつつある長崎市は前年、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」をユネスコ（UNESCO）の世界遺産（World Heritage）暫定一覧表に登録した。

■ <http://www.afpbb.com/article/life-culture/religion/2541179/3540470>